

P E T G U I D E S E R I E S

ペット・ガイド・シリーズ

ザ・チンチラ

テンジクネズミの仲間の生態と飼い方

リチャード C.ゴリス著
Richard C. Goris



誠文堂新光社



ペット・ガイド・シリーズ ザ・チンチラ

CONTENTS

はじめに……………6

1 チンチラとは……………7

チンチラの分類と名前の由来
チンチラの毛色

スタンダード／ページユ／ブラック・ベルベット／エボニー
ホワイト／ブラウン／シナモン／バイオレット／シルポイント

COLETTO 野生のチンチラ……………25

2 チンチラの歴史……………29

先住民チンチャ族とチンチラ／インカ王族のシンボルに／スペイン女王とチンチラの受難
絶滅の危機へ／救い主、チャブマン氏現る／赤道を越えてアメリカへ／チャブマン氏の勝利

COLETTO 野生のチンチラ……………40

② 野生チンチラの法的保護

3 チンチラの「スリーサイズ」……………43

大きさ／被毛／ひげ／尻尾／手（前足）／足（後ろ足、後肢）／耳／鼻／目／性器／歯／色

COLETTO 野生のチンチラ……………62

③ チンチエロの狩り方



① チンチラの乱獲

Jaime E. Jimenez博士 (チリ、ロス・ラゴス大学、生態学研究所)
訳・Richard C. Goris博士

チンチラ・フィーバーの時代

現在は2種のチンチラが認められています。かつては「チンチラ」という名称はすべてのチンチラの総称でした。従って、古い文書や商業的報告書では「種」の区別はされていません。

チンチラは古代から人間に利用されてきました。ペルーのインカ族(Incas)やチリ北部のアタカメニョス族(Akakameños)は昔からチンチラの被毛の柔らかさを珍重し、布に織って王侯貴族の衣類を作っていました。また、チンチラの肉も白身で、脂がなく、おいしいので、食べられていました。

そして、チンチラの毛皮は黄金と同じく珍重されました。スペイン人はアンデス山脈を植民地にしてからほどなく、チンチラ毛皮の柔らかさ、美しい配色、保温性などに気がつき、入植者たちは早くも1500年代にヨーロッパからチンチラの毛皮を送っています。

人々はたちまちこの美しい毛皮に魅せられ、ヨーロッパでの需要はあっという間に増えました。18世紀にはさらに大量の毛皮がスペインへ輸出され、これによって毛皮貿易が始まり、植民地における狂気じみた「チンチラ狩り」の幕が上がったのです。

チンチラ毛皮の商業的な利用は18



チンチラ狩りはスペイン人や先住民にとって、またとない儲けのチャンスとなりました。野生のオナガチンチラの幼体。



かさを増すためにチンチラの毛皮の束の内側に混ぜられたハイイロチンチラネズミ

28年からです。当初はヨーロッパの需要はそれほどではなかったのですが、時とともに増え、アンデス山脈地方のスペイン人や先住民にとって、またとない儲けのチャンスとなりました。チンチラの毛皮コートがファッション界で大流行し、値段は急騰しました。需要を反映して現地ではより多く

の住民が「チンチイエロ」「チンチラ捕り」になり、彼らは、あたかも北米西部のカウボーイのように、チンチラの住む高山の乾燥地帯を象徴する人種となりました。

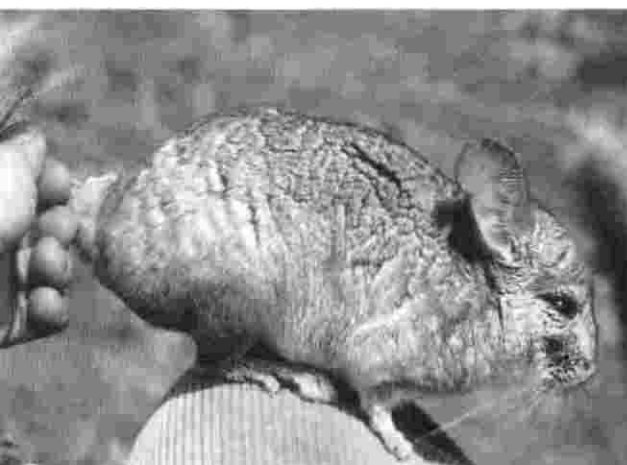
当初、チンチラ捕りたちは、かなりの儲けがありました。高値が付いたし、チンチラも多かったので、あまり苦労せずに現金が手に入ったのです。毛皮を集めていた中間業者らは、実際は大して払っていなかったのですが、牧童たちやチリ北部の鉱山労働者たちにとっては大変ありがたい収入源でした。その結果、鉱山労働者が足りなくなることさえあったのです。

需要の増大につれ、チンチラ狩りが増えます盛んになり、チンチイエロたちは山地をくまなく回ってチンチラ捕りに励むようになります。彼らは地元のプローカーに安い値で毛皮を売り、プローカーは毛皮をあちこちの町に運びました。町では毛皮が12枚一束にされ、北部の輸出港に輸送されました。

かさを増やすために、高原のハイイロチンチラネズミ *Abrocoma cinerea*、あるいは北部の砂漠地帯のベネットチンチラネズミ *Abrocoma benetti* (二) これらの種類はチンチラより小さく、毛皮の質が劣っていました) の毛皮がよく束の内側にこっそり混ぜられることもありました。チンチラ毛皮の輸出先は主に米国、英国、フランスおよびドイツでした。

こうした広範囲にわたる絶え間ないチンチラ狩りの影響で、チンチラの繁殖力が捕られる数に追いつかなくなり、その数はだんだんと減り始めました。やがて山麓から消えてしまったため、チンチイエロたちはさらに高地を目指しましたが、チンチラ狩りはますます難しくなり、捕られる数も当然減っていったのです。

一方、毛皮量の減少は国際市場を刺激し、値段は急騰しました。この価格の上昇は、さらにチンチイエロたちを刺激し、彼らはますますチンチラ狩り



現代に生き残った野生のオナガチンチラ。その毛皮は古くから人間に利用され、18世紀からの乱獲により、絶滅の危機に追いやられてしまいました。

もいなくなりました。乱獲による供給源消滅の典型的な例でした。

野生チンチラの統計

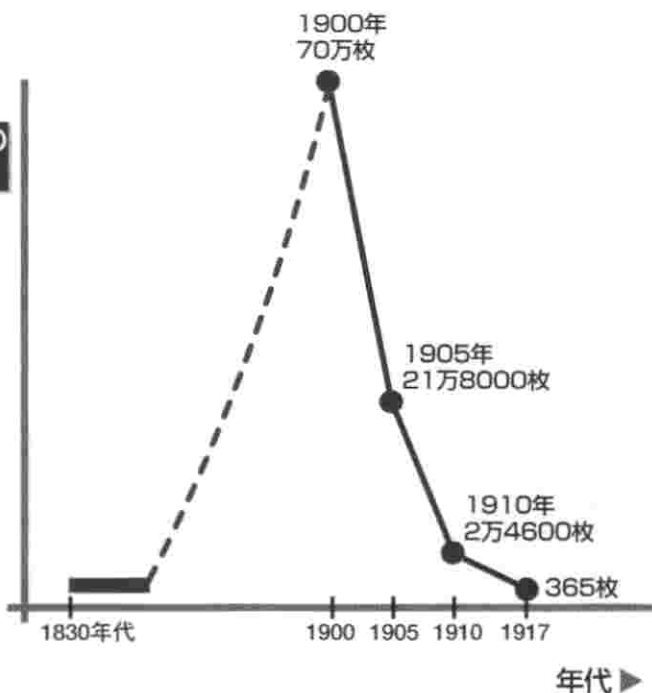
に力を入れるようになります。より効率的のよい捕らえ方も発案され、高い値段のおかげでチンチイエロたちは捕れる数が少なくても生活でできるようなりました。こうして、チンチラたちはサバイバルの戦いのうち負かされたのです。先ず山麓や入りやすい山地から消え、やがて人里から離れた場所から

古い記録やチリ国立統計局のデータを調べれば、チンチラの迫害の規模を知ることができません。ほとんどの毛皮

はチリの港から輸出されたようですが、合法的な輸出でも、報告されたのは実際の枚数の3分の1にすぎなかったようです。また、チンチラ狩りの段階で傷ついた毛皮も多かったこともあり、輸出の統計だけでは実際に殺されたチンチラの数を知ることができません。ですからここにあげる数字はかなり少ないものと思っただけです。

1810年頃まではチンチラの商業的利用は少ないものでした。その後毛皮の輸出は1830年代の年平均2800枚から1900～1909年の平均25万4000枚まで増えてゆきました。ピークは1900年の70万枚で、1905年までに輸出は21万8000枚まで減り、1910年には2万4600枚だけになりました。1917年にはわずか365枚が報告され、事実上輸出は止まったのですが、1840年から1916年まで合計700万枚の毛皮がチリから輸出されたことになります。さまざまな要素を計算に入れると、この数字は2100万匹の野生チンチラが殺されたことを示唆しています。

一方、報告のあった84年の間、インフレの影響も考慮すると、価格は568倍にも跳ね上がったことになりました(0.088ペソから50ペソまで)。1920年には、米国ミズーリー州セント・ルイス市でチンチラの毛皮1枚が170ドルもの高値で取り引きされていました。

チンチラ毛皮の
年間輸出量

19世紀から20世紀初頭までのこの時期に、チンチラは狂気じみた乱獲によりほぼ絶滅してしまいました

チンチラ毛皮の輸出港は当初のチリ北部から、次第に南部の港へ移りました。この事実を考えると、当初のチンチラはチリ北部、ボリビア、そしてアルゼンチンの北西部のものだったと推測されます。これはかつてタンビピンチラが分布していた地域です。ここで少なくなるとチンチイェロたちはだんだん南へ移動し、おもにオナガチンチラを捕っていたと考えられます。

乱獲が最もひどかった1885年から1910年までのわずか25年間で、チンチラはほぼ絶滅してしまいました。昔の自然科学者によると、20世紀前半にはすでにチンチラはもとの分布地域にはほとんど残っていない状態で、事実上絶滅していました。それでも1968年までは、オナガチンチラはまだときおり捕られていたのですが、1978年までにはチンチラというものはチリでは完全に絶滅したと考えられました。タンビピンチラの最後の記録は1953年でベルーからでした。

② 野生チンチラの法的保護

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所)
訳・Richard C. Goris博士

1890年代にはすでにチンチラの

近い将来の絶滅が危惧され、一部の人たちが保護運動を起こしました。その結果、1898年にチンチラ狩りを制限する法律が施行されましたが、この法律やその後には作られた法令は、実際にはまったく適用されませんでした。

1910年にはチンチラ毛皮の主な輸出国、すなわちチリ、ペルー、ボリビア、アルゼンチンはチンチラを保護する初めての国際条約を批准しました。この条約でチンチラを捕まえたり商業的に利用したりすることが禁止されたのですが、条約の結果はチンチラ毛皮の価格を急上昇させただけでした。条約前に比べ価格は14倍にも跳ね上がってしまったのです。

チリではその後、1929年に毛皮動物を保護する初めての法律が施行されました。大変厳しい法律ではあったのですが、これもほとんど適用されませんでした。チンチラの密猟が事実上終わったのは、今からほんの30年ほ

ど前のことです。

現在では、チンチラの両種がCITES (Convention on International Trade in Endangered Species、いわゆるワシントン条約)の付属書1、すなわち最も厳しく商業取引引きが規制されている動物のリストに掲載されています。チリでは「Endangered」「絶滅に瀕している」種、IUCN (International Union for Conservation of Nature and Natural Resources国際自然保護連合)では「Threatened」「絶滅危惧」種と見なされています。

チンチラ養殖の始まり

20世紀の初めに、何人かの企業家が北部チリと北部アルゼンチンの農場でチンチラの養殖を試みましたが、その多くは失敗に終わりました。というのも、依頼された農家はチンチラの生態をあまりよく理解していなかったのです。また、多くの農場では、石垣で囲まれた囲いにチ

チンチラの保護区への入口



銅山に捕れた野生のオナガチンチラ



チンチラを放し飼いでいたため、しばしば野生動物に食べられたり、病気で死んでしまったのです。ちなみに、タンビチンチラに比べ毛皮の値段が安いものの、比較的飼いやすく、繁殖力が強いので、オナガチンチラの方が繁殖の試みに多く使われました。

現在飼育されているチンチラのほと

んどは、1923年、北部チリのポトレリーヨス (Potrerillos) 近辺で銅山の米国人技師チャブマン氏が捕獲し、アメリカに持ち帰ったオス9匹、メス3匹の子孫です。この最初の12匹が何種だったのかはわかっていませんが、今では世界中にチンチラ養殖場があります。チリでは養殖されたオナガチン

チラを野生に

戻すプログラムが実施されましたが、失敗に終わりました。同様のプログラムがアメリカのカリフォルニアと中央アジアのタジキスタンでも実施されましたが、やはり失敗しています。

チンチラのかつての分布

チンチラは、元の分布域の大部分で早い段階で絶滅させられましたし、人々はタンビとオナガを区別していなかったため、元の分布範囲は正確にはわかっていません。ちまたの言い伝えや、また聞きの話によると、「アンデス種」(つまりタンビチンチラ)は海拔3000m以上のアンデス山脈に分布していました。タンビチンチラはペルー南部、ボリビア西部、アルゼンチン西部、およびチリ北部ラ・セレナ (Sesena) 市以北に分布していたと言われています。しかし、筆者の経験に基づいて考えれば、ラ・セレナ市ほど南までは分布していなかったと思われる。

また、「沿岸種」(つまりオナガチンチラ)はチリだけに分布し、沿岸の険しい山脈で、タンビチンチラよりも低い標高に生息していたようです。古い



保護区の野生のオナガチンチラとヒメネス博士（1980年代）

文献によれば、この種は北部のタルタル (Taitai) 以南からタルカ (Talca) まで分布していたと思われます。しかし筆者の経験や他の証拠にもとづけばイヤベル (Iyapel) あたりのチヨアパ川 (Chopa River) より南には分布していないかっと思われれます。

オナガチンチラの再発見

1975年、アメリカ平和部隊のコンニー・モリス (Connie Morris) 氏は元チンチエロのバルドメロ・ベニャ (Baldomero Peña) の助けを得て、オナガチンチラが野生でまだ生存していることを立証しました。チリの北部中央、イヤペルー町の北方17kmにあるアウロ (Aucó) 地方でチンチラの複数のコロニーが発見されたのです。北部チリのほとんどと同様に、この地方も国有入会地だったので、ヤギの飼育がぎによって、非常に荒れていました。もとはトゲの多い低木と大きな石ころに覆われたこの土地は、ヤギや薪取りなどの影響で今や植物が完全になくなっていました。

チンチラの再発見を受けて、チリの林野局 (CONAF) はその土地を買収し、保護しようとして動き出しました。多難な道の上ではありましたが、大勢の農民との

取り引きの末、CONAFは4229haの買収に成功し、1983年、「国立チンチラ保護区」を制定しました。管理棟が建てられ、野生化したヤギ、ロバ、牛などが入れないよう、保護区全体の周囲にフェンスがめぐらされました。

この保護区の最初のレンジャーにはベニャ氏が任命され、彼は厳しく部外者の入場を禁止しました。続いてモリス氏が、WWF (World Wide Fund for Nature 世界自然保護基金) とCONAFの援助を得てチンチラの野生生態の観察を始め、この調査は、後にいろいろなチリ人の学者によって受け継がれました。私も3年半の間、チンチラを調査し、保護区隣接の地域にも他のチンチラのコロニーをいくつか発見しました。が、残念なことに、1990年代前半にチンチラへの興味が薄らぎ、予算も削られたため、CONAFはチンチラの研究をうち切り、チンチラ以外の目的を持つ研究者が保護区を訪ねるようになりました。

③ チンチエロの狩り方

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロス・ラコス大学、生態学研究所)
訳・Richard C. Goris博士

チンチエロ(チンチラ狩りの人々)はどんな方法で狩りをしていたのでしようか？

最も簡単な方法は鉄のボールで大きな石をどかして捕まえるやり方ですが、これには力が要り、能率が悪かったため、しばしばダイナマイトが使われました。しかし、ダイナマイトを使う方法だとある程度は捕れましたが、同時にチンチラが利用できる岩場を破壊してしまうことにもなったので、その場所からチンチラがいなくなる結果を招きました。

犬やフェレットでの狩り

チンチラの巣穴を探り出し、逃げ惑うチンチラを捕まえるために、チンチエロたちは犬、なかでもフォックステリアを訓練して使いました。また、犬の他にヨーロッパから輸入したフェレット、または地元のフェレット *Galictis cuja* も訓練して使いました。

これは、チンチラが逃げられそうな穴をすべて石などでふさぎ、メインの入り口からフェレットを入らせるという方法で、フェレットがチンチラをかみ殺して引つ張り出すか、追い出して待ちかまえているチンチエロが捕まえるというものでした。北部チリでは未だに石でふさがれたチンチラのかつての巣穴がたくさん見られます。また、火を焚いて煙でチンチラを巣穴から追い出す方法も使われました。

手鏡と針金

さらに、手鏡の反射で穴の中を照らす方法も使われました。鏡で照らし、穴の壁に血の跡がついていたり、底に糞が落ちていたりしていれば、その穴が使われていると分かります。そこに、先端が螺旋状に曲げてある針金を穴に差し込むという方法です。感触でチンチラがいるのを確認すると、針金をぐるぐる回し、先をチンチラの被毛に絡



チンチラ狩りにはさまざまな罠が使われました。
1980年代に使われていた簡単なネスミ捕獲器

ませ、引っ張り出す。この猟法はごく最近まで使われ、私も地元の人がこれでチンチラを簡単に捕まえているのを目で確かめたことがあります。

カルドネスの砦を攻める

また、適当な岩場の割れ目がない場所では、チンチラは「カルドネス」(cardones, *Puya berteroniana*)という大きなブロメリア(アナナス、パイナップルの仲間)を利用していました。トゲにおわれたこの植物は赤道直下の山腹にたくさん生えていて、チンチラにとって格好の砦になります。チンチラの手足は地面を掘るのには適していませんが、歯が鋭いのでカルドネスの太い茎をかじって、茎の根元まで

Photo : ©2002 Jaime E. Jimenez

トンネルを作って住んでいました。そこでチンチエ口たちは道具でカルドネスを割ったり、火を放ったりして、中のチンチラを追い出し、犬などを使って捕まえていました。チンチエ口たちが頻繁にこの方法を利用したので、地平線上に、一度に数多くの山火事の煙を見かけることが珍しくないほどでした。しかし、こうしてチンチエ口たちはチンチラだけでなく、カルドネスなどの関連する動植物もすべて絶滅に追いやったのです。

チンチラ狩りの全容

自分の手で地面を掘れないので、チンチラはしばしば他の動物の掘った巣穴を利用しました。その場合、チンチエ口たちは簡単にチンチラを掘り起こすことができました。そして、こうした穴の中から思いがけない宝物が出土することもありました。文献によると、チンチラは地方によって、干ばつ

などに備えて食用の種を蓄える習性があったというのです。とくにたくさん集めていたのはアルガルロピヤ (*agga tobilla*, *Balsamocarpon brevifolium*) という植物の種でした。

アルガルロピヤはごつごつした岩の斜面に生え、種の入った鞘をつけるのですが、種はタンニンをたくさん含んでいるので、なめし皮業界で重宝されていました。が、この種は集めにくいため、かなりの高値で輸出されていたのです。つまり、チンチラの巣穴を掘り起こすと、チンチエ口たちは二つもの宝、すなわちチンチラとアルガルロピヤの種を一度に手に入れることができたというわけです。ちなみに今日では、チンチエ口たちの乱獲によって、このアルガルロピヤという植物もまた絶滅に瀕しています。

罟

チンチエ口たちは罟も使いまし

た。最も簡単にポピュラーなのは「4号の罟」と呼ばれた方法です。3本の細い棒を「4」の形に組み、これに重い石を立てかけるといふもので、チンチラの好きな餌を棒の一本に取りつけ、チンチラが餌を引っ張ると棒がはずれ、石でチンチラが圧死するという仕組みでした。しかし、この罟はチンチラの成体だけでなく、子チンチラや他の種類の動物も無差別に殺すものでした。

さらに、動物を生け捕りする金網のねずみ取りの罟も使われました。入り口に特殊なドアが仕込まれて、動物が押すと簡単に入れるのですが、一度入ったら出られないというものでした。未だに、放置されたこの種の罟が山にあちこちに見られます。また、まれに輪縄、虎ばさみ、毒団子、そして動物を罟へ導く布製の長いフェンスなども使われていました。

④ 野生チンチラの生態

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロズ・ラゴス大学、生態学研究所)
訳・Richard C. Gons博士

何十年の間、毛皮を取るためにチンチラ狩りが行なわれましたが、野生チンチラの生態や自然史については、ほとんど何も知られていませんでした。以下の記載は、筆者が1980年代にWWF(世界自然保護基金)とCONAF(チリ林野局)の支援で、3年半の間に行なった調査にもとづくものです。目的は、野生チンチラの保護と管理のための生物学的データを得ることでした。

大きさ

成体の体重は500gにもなることがあります。オス・メスとも、たいがい450gぐらいです。おおよそ13cmの尻尾を含め、体長は36cmぐらいになります。現在の養殖チンチラに比べて野生のものはネズミに似ています。被毛は他の哺乳類のどの種よりも断熱効果がすぐれ、腎臓もどの種よりも尿を濃縮でき、水分を節約できるように

なっています。この暖かい被毛と能率のよい腎臓は、寒くて乾燥した環境への適応です。やや大きめの耳(5cmぐらい)はすぐれた集音器として働き、非常に発達した中耳と内耳に音を導いて、捕食者が忍び寄る足音までも感知することができま。

子育て

野生ではチンチラは年に2回繁殖します。ピークは、南半球の春(9~10月)と晩夏から初秋にかけて(2~3月)です。子供は体重60gになると巣穴からでるようになります。一腹の数は正確には知られていませんが、メスの6つの乳頭のうち、2つだけから乳が出るので、一腹2匹だけだと思われます。また、体が小さいわりに、チンチラはとても寿命が長い。私は6年前に耳に印を付けた個体を数匹再捕獲したこともあり、他の捕獲個体も年齢は少なくとも4歳以上でした。

体と行動

チンチラは完全に夜行性で、非常に機敏に走り回ります。尻尾でバランスを取りながら、後ろ足ですばしこく岩から岩へと跳躍します。後ろ足が跳躍に適して長くなっており、指は3本だけが発達しています。ゆっくり歩くとときには前足も使いますが、前足はおもに食べ物をつかむために使われます。爪は平らで、地面を掘るには適していません。また、後ろ足の内側の指には「くし」のような堅い毛が一揃いあり、毛繕いに使われます。

夜行性動物にふさわしく目は大きく、瞳孔は猫などのように縦の楕円形になっています。長いひげを持ち、狭い環境中での移動や暗い巣穴に入るときに役立つと思われます。夜の活動を観察すると、すばしこい追いかけてこがよく見られますし、人間の耳にもよくわかる、いろいろな鳴き声が聞こえます。

小高い岩を見張り場に使うらしく、そうした小高い場所は尿や糞ではつきりマーキングされています。また、被毛を整えるために、崩れた岩からできた砂でよく砂浴びをします。

食べもの

野生チンチラは、イネ科やその他の草、低木、種、サボテンの実、樹皮などを食べます。最も好むのは草とサボテンの実です。餌を自由に選べさせる実験では、生のものより、枯れた草の類を選びました。いろいろな理由があるでしょうが、山の草の一部は草食動物から身を護るため毒の成分を含んでいるものの、枯れるとその成分が揮発してしまふことが、おもな理由だと考えられます。また、生のものと違って枯れ草は夜露を吸収して濡れるので、これを食べることで、チンチラは必要な水分を摂取しているとも考えられます。



調査のために発信機をつけられた野生のオナガチンチラ

社会

チンチラは数匹から400〜500匹までのコロニーを作って生活しています。観察データはまだ不十分ですが、どうやら家族単位で共同のトンネル網を利用して生活するようです。同じ斜面に棲んでいる複数の家族が一つのコロニーを作り、コロニーの境界線を糞でマーキングします。糞は黒っぽくて細長く、大きさは個体の大きさを反映します。糞を点々とバラバラに落とすことでもあります。石の上を共同トイレに使用して溜糞することもあります。この溜糞がコロニーの境界を決める役割をしているようです。

また、同じ場所に棲んでいる他の小動物に比べてチンチラの生息密度は低く、生け捕りや溜糞を数えるなどして推測しますと、1haあたり2〜8匹だと考えられます。



ナンベアカギツネの糞の中に見られたチンチラの臼歯



野生チンチラの天敵となるナンベアカギツネ

チンチラの捕食者

チンチラの生息地には12種の捕食者が分布していますが、チンチラを食べるものとしては、そのうちの4種が知られています。ワシ/ミズク (*Bubo magellanicus*)、メンフクロウ (*Tyto alba*)、およびコビトフクロウ (*Glaucidium nanu*) はチンチラの子どもを食べ、ナンベアカギツネ (*Pseudalopex culpaeus*) は子どもも成体も食べます。食べられた動物の種類や大きさはこれらの捕食者の糞に残る骨や歯で推測できます。

これら4種の他にチンチラに危険と思われる動物は、ヤマネコ (*Oncifelis colocolo*)、ピューマ (*Puma concolor*)、そしてその地方固有のフェレット (*Galictis cuja*) です。しかし、これら3種については確かな報告はありません。ただ、チンチエロたちがチンチラを捕まえるようにフェレットを訓練

していた事実がありますので、自然でもチンチラを食べている可能性はあります。

寄生虫

私の知っている限り、野生のチンチラについて1種だけの寄生虫が報告されています。それは人間の「チャガス病」の原因になるトリパノソーマ鞭毛虫（べんもうちゅう）の一種です（トリパノソーマの仲間人間の「眠り病」の原因にもなります）。媒介は、「ヴィンチュカ」という動物や人間の血を吸う昆虫です。血を吸いながら糞を相手の皮膚に落とし、相手がかゆみのために刺されたあとをひっかくと、糞にいる寄生虫がひっかき傷から血液に入り込みます。人間では心臓肥大、胃腸の腫瘍、流産などの原因となります。調査したチンチラの40%がこの寄生虫を血中に持っていました。発病は観察されていません。

生存競争相手

環境の限られた資源、すなわちシエルターと餌に関してチンチラと生存競争する動物は何種かいます。たとえば、チンチラと同じ穴やトンネルを利用する小型哺乳類がいます。有袋類のヒメオポッサム（mouse opossum, *Thylamys elegans*）や齧歯類のデグー（*degú, Octodon degus*）、ベネットチンチラネズミ（*Bennett's chinchilla rat, Abrocoma bennetti*）、ハリネズミ（leaf-eared mouse, *Phyllotis darwini*）、オリーブネズミ（olive mouse, *Abrothrix olivaceus*）、ウーリーネズミ（wooly mouse, *Abrothrix longipilis*）、おちびトビイネズミ（jumping rice rat, *Oligoryzomys longicaudatus*）がいます。これらの齧歯類は餌に関してもチンチラと競争しています。さらに、テグー科トカゲの一種（*Callopistes palluma*）もチン

チラと同じ穴を利用します。また、数百年前に人間が連れてきた家畜のヤギも餌に関しては恐ろしい競争相手です。



野生のチンチラと生存競争する動物の一種に齧歯類のデグーがいます

Photo: ©2002 Jaime E. Jimenez

⑤ 野生チンチラを とりまく環境

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所)
訳・Richard C. Goris博士

太平洋の水温が チンチラに及ぼす影響

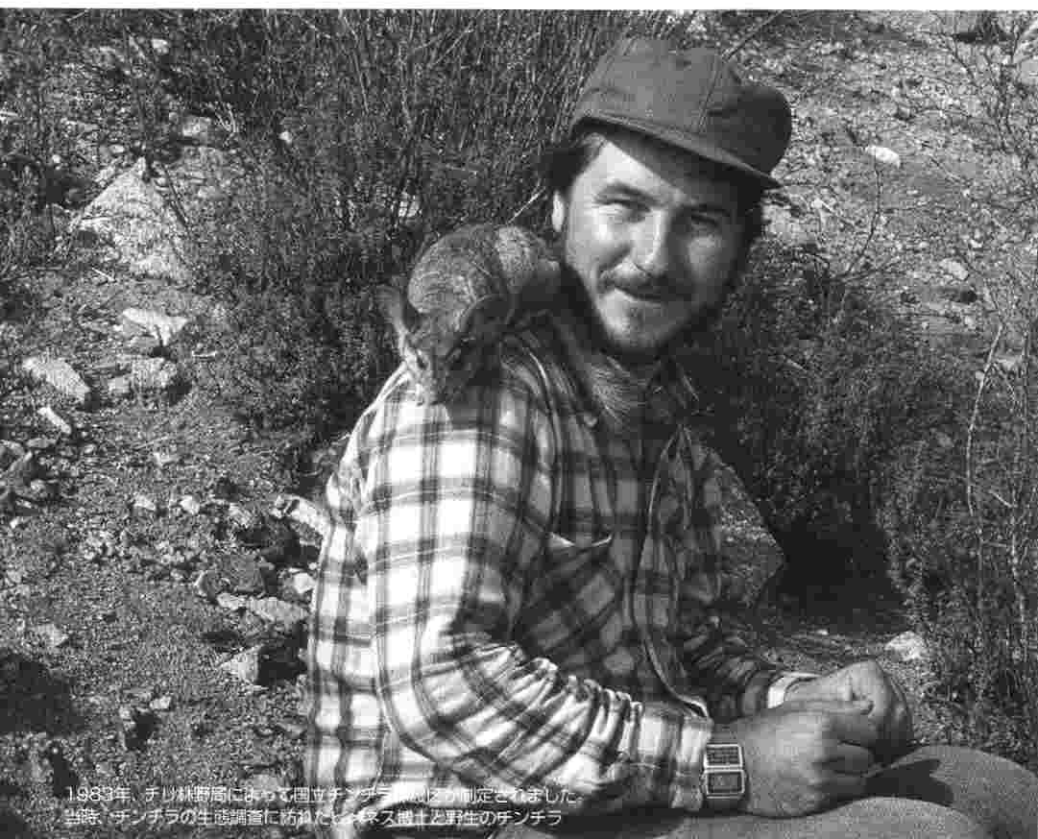
オナガチンチラの現在の分布は、チリ国立チンチラ保護区とその周辺、およびその北方250 kmにある46 haのコロニーに限られています。この地域は暖かくて乾燥しており、雨は少なく、降るのは冬だけです。4年ないし12年おきに太平洋でエル・ニーニョ現象が起こるのですが、このときは降雨量が増え、植物が生い茂り、それに伴ってネズミ類の大発生も起こります。そして当然ながら、ネズミたちを餌にしている捕食者も増えてきます。一方エル・ニーニョ現象が終息すると、降雨量がまた少なくなり、草花は枯れ、ネズミ類の数も激減します。

しかしチンチラはエル・ニーニョの影響をあまり受けず、数の増減は見られません。それはチンチラの繁殖速度が緩やかで、枯れた草でも十分な栄養を摂れるからだと思われれます。その結

果、降雨量の少ない時期になって、ネズミ類が減ると、より多くのチンチラが捕食者の餌食になります。

生息環境

チンチラが生息しているのは険しい山地です。1900 m級の山々の間には深い谷間がたくさんあり、標高400 mあたりまで下らないと平らなところはありません。植物層はおもにトゲの多い低木で、多肉植物も若干あります。山の北斜面は乾燥していて、砂地と岩場が多いのですが、南斜面は砂地や岩場がそれほどありません。北斜面にはサボテンや「カルドネス」(Cardones, *Puya berteroi*)と「う大ななフロメリア」(う大ななさんあり)があり、その間に少量の草が生えています。一方、南斜面には草が多く、サボテンとカルドネスはあまり生えていません。



1983年、チリ林野局によって国立チンチラ保護区が制定されました。当時、チンチラの生態調査に訪れた研究者と野生のチンチラ

コロニー

チンチラはたいがい岩石が突き出ていて、カルドネスの多い北の急斜面（15〜39度）をすみかを選びます。水のあるところから必ず遠く離れていて、コロニーとコロニーの間も広く開いています。が、「渡り廊下」でつながっている場合もあります。また、季節によって斜面を上や下へ移動するコロニーもあります。つまり、チンチラの個体群は「渡り廊下」でつながった複数のコロニーで成り立っているのです。さらに、「渡り廊下」を通じて行き来はするものの、生まれたコロニーから遠く離れることは滅多にないといわれています。放牧のヤギが個体群の中に入り込むと、この渡り廊下を破壊して個体群全体に計り知れないダメージを与えます。

現在、野生のオナガチンチラの生息地は、この4,299haの保護区とその周辺、そしてここを北方にある49haのコロニーに限られています



チンチラの数

筆者が、徒歩または乗馬でチリ国立チンチラ保護区を中心に13×20 kmの地域をくまなく調査したところ、溜糞から判断して保護区内には19のコロニー、周辺に23のコロニーがあることがわかりました。保護区の外のコロニーは、一部が人家のかなり近くにあり、残りは家畜の放牧地区にあります。地元の間はチンチラの存在にほとんど気がついていないようです。

コロニーの広さは様々で、1.5ないし113.5 haです。コロニーの60%にはチンチラが50匹未満で、多いコロニーでも500匹未満です。繁殖力が弱いので、匹数の少ないコロニーは常時減じる危険にさらされています。1990年の時点で、全コロニーの面積×1平方mあたりの推定匹数を計算してみると、保護区内には1122ないし5500匹、保護区外には

Photo: © 2002 Jaime E. Jimenez

1318ないし6205匹が生息していると推定されました。

チンチラ保護にとっての障害

チンチラの数はどんどん減っている傾向にあるようです。1982年〜1989年の間、コロニーの総面積は半分に減りました。また、発見当時12の

大きめのコロニーであったものが、現在28の小さめのコロニーに分かれています。これはチンチラの数が減少傾向にあることを示しています。いろいろな理由があるでしょうが、保護区内の捕食者、とくにキツネが増えたというのがその一つでしょう。周囲に人家が増え、生ゴミなどを食べてキツネは数を増す。しかし、人間がキツネを追い払うので、キツネは保護区のフェンスをくぐって人間の迫害を逃れ、そしてチンチラを食べるという説です。もう一つには、チンチラが回復不可能な少数になってしまったという説もありま

す。

保護区外では、金や銅の発掘活動やヤギの放牧がコロニー間の通路を破壊し、コロニー同士の交流を不可能にします。また、この地区のほとんどの人家では犬や猫を放し飼いにしていますので、これらのペットが保護区内外のチンチラに与えている害は計り知れませんが、

もう一つの大きな問題は、保護区の形と交通機関です。交通量の多い舗装道路と鉄道が保護区を真っ二つに分断しています。ですから、二分された双方の区域のチンチラの交流が不可能になっているのです。なお、分断された土地の形はだいたい四角形なので、保護されていない土地との接触面積が多くなっています。

著者の考えでは、まず第一に、保護区を円形に拡大する必要があります。拡大することによって、チンチラのコロニーは敵の侵入する境界地区から引き離されることになるし、円形にする

ことによって、敵の存在する非保護地区との接触面を少なくすることになります。また、現在のように境界線沿いにフェンスをめぐるす必要があります。

第二に、保護区のまわり、フェンスの外に緩衝地帯を設けるべきです。この緩衝地帯では、人間の立ち入りは認めず、一方、住居その他の建設物を禁止し、家畜の放牧なども禁止すべきです。

第三には、政府当局による長期の観察・研究プログラムが必要です。これ得られる日常的なデータこそ、チンチラの生存を保证する土台になるでしょう。

その他にも、保護地区を通る道路や鉄道を撤去することが望まれるのですが、現状では難しいでしょう。キツネを駆逐する案も出されていますが、キツネがいなくなると、フェンスに抑えられているチンチラの他の天敵が増える可能性がありますから、あまり現実的な案とは言えません。

⑥ タンビチンチラの再発見

Jaime E. Jimenez博士 (チリ ロス・ラゴス大学、生態学研究所)
訳・Richard C. Goris博士

タンビチンチラは1943年で絶滅したと見なされてきました。最後に正式記録記録されたのは、ペルーでは1955年、ボリビアでは1939年、チリでは1950年代のことでした。アルゼンチンからは全く情報がありませんでした。CONAF (チリ林野局) とWWF (世界自然保護基金) は、1980年代に数回にわたってチリ南部と北部を調査しましたが、タンビチン



タンビチンチラは、オナガチンチラと比べ、体全体はやや大きく、尻尾、耳、四肢は短く、丸みのある形をしています

チラは1匹も見つかりませんでした。2000年に、筆者はチリ北部に新しく作られたユヤイヤコ(Lulililaco)国立公園を調査中、チンチラらしい溜糞を発見しました。ユヤイヤコ国立公園は、チリ北部アンデス山脈にそびえる6000m級のユヤイヤコ火山の山腹、標高3100mにあり、面積は27万haです。砂漠のようなこの荒地は、地球上最も降雨量の少ない地域のひとつです。

その後まもなく、チンチラの溜糞で標識されたなわばりの中で、キツネの糞を見つけました。糞の中にチンチラらしい歯とふわふわした毛が含まれていました。このときは、この毛や歯がチンチラではなく、マウンテン・ビスカチャのものである可能性があると考えたのですが、数日後、同じ場所ですチンチラらしい古い頭蓋骨と、しばしばチンチラと同居するハイイロチンチラネズミの頭蓋骨を見つけました。

チンチラがいるに違いないと意気込



ユヤイヤコ国立公園はチリ北部アンデス山脈の山腹の標高3100mにあり、面積は27万haです



タンビチンチラの生息地は極度に険しく、気候も厳しい環境です

んで、2001年3月にそこにあった断崖の麓に罠をいくつか仕掛けてみたところ、ついに成功！ 3晩で11匹のタンビチンチラを捕まえました。

タンビチンチラと確認してから、5匹はその場で解放しましたが、生理学者の仲間一人は、研究したいと言って、南方1000kmにあるラ・セレナ市(La Serena)に残りの6匹をつれて帰り

ました。研究が済んだら解放するとう約束でしたが、嘆かわしいことに1匹はまもなく(ストレスで?)死に、あとの5匹も未だに野生に戻されていません。あらゆる手段で保護すべきこの動物について、このようないかがわしい「研究」を許可した政府当局は厳しく非難されるべきだと筆者は考えています。

タンビチンチラの現状

その後も筆者は調査を続け、70km×70kmの地域におよそ16コロニーを発見しました。コロニーのほとんどはユヤイヤコ国立公園の中にあります。罠にかかった匹数とオナガチンチラでの経験から類推して、1コロニーは1〜5haの広さで、1コロニー内に棲んでいるのは2〜4ないし20〜30匹と思われます。

また、ユヤイヤコより北方200km、アルゼンチンとボリビアの国境近くにも「チンチラ熱」の時代にタンビチンチラがたくさん捕獲された環境がありますが、このときの調査では1匹も見つけることができませんでした。

タンビチンチラの生息環境

タンビチンチラは極端な環境に生息しています。地形は極度に険しく、気

候も厳しい環境です。現在生存している地方はチリのアンデス高原の一部で、険しい火山や岩石からなる山脈の間に広い高原があり、高原の方々に深い峡谷があります。いくつかの峡谷には溪流が流れていますが、低温のため、ほとんど一年中凍っています。さらに、強い風がほとんど一年中吹いています。湿度はおおむね低く、気温は日差しの強い真昼でも減少に氷点より上がることはありません。10年に1〜2回、雷鳴が響き、少量の雪が降ります。もう少し標高が下がったところにはプンタ・ネクラ塩原という30km×10kmの塩に覆われた高原があります。

タンビチンチラの自然史

タンビチンチラの配色はオナガチンチラのとほぼ同じですが、成体はオナガより体がやや大きく、体重も重い。8cmの尻尾を含め、体長は36cmぐらいです。メスはオスより大きく、650

gぐらいになります。タンビチンチラは名前の通り、尻尾と耳と四肢がオナガチンチラのものより短く、被毛は深く、形は丸っこい。短い四肢や深い被毛は体熱の流出を防ぐだけでなく、液体の蒸発も防ぎ、極端に乾燥した環境への適応と思われれます。また、糞のペレットはオナガチンチラのものと同じく、堅くて黒く、長径は10mmぐらい、厚みが3mmぐらいです。置にかかった個体を放すと、素早く走ったり跳ねたりして、人間の手が入らないような岩の隙間に逃げ込みます。全体の行動から類推してタンビチンチラはオナガと同様、完全に夜行性であると考えられます。

また、タンビチンチラは、オナガチンチラと同じく、境界のはっきりしたコロニーで生活をし、1コロニーは2ないし30の個体からなります。コロニーは、必ず大きな石がごろごろしている、あるいは岩盤に割れ目の多い斜面に作られています。巣穴として石と石

の間の狭い隙間、あるいは岩盤の狭い割れ目を利用します。狭い巣穴の利点として、捕食者から身を守れることだけでなく、気温の急変や極度の乾燥からも守れるという点もあるでしょう。

これまで発見したタンビチンチラのコロニーは例外なく標高3000m以上で、全く水のない斜面であることから考えて、コロニーにとって一番大事な立地条件はおそらく適当な隠れ穴の多いことでしょう。水はおそらくほとんど餌から得るものと思われれます。

タンビチンチラ生息地のもう一つの特徴は植物層の貧弱さです。植物がおおむね面積は地面の5〜10%、またはそれ以下です。非常に堅くて、低いイネ科の草や、トゲと毒素を持った低木がほとんどで、若干の小さくて丸いサボテンもあります。また、これらのほとんどは、地上の部分よりも地下の根の部分が多い植物です。

この厳しい環境にも、他にわずかの脊

椎動物がいます。チンチラと同じ岩場を利用するものとしては、ハイイロチンチラネズミとキタハミネズミ (*Phyllotis xantophygus*) がいます。さらに、近くの急斜面にはマウンテンビスカチャ (*Lagidium peruanum*) が昼間活動しています。もっと平らなところにはビクニーヤ (*Vicugna vicugna*) がイネ科の草を餌としています。また、2〜3種のトカゲもいます。鳥では、オオレア (*Pterocnemia pennata*) とチナムー (*Tinamotis pentlandii*) がビクニーヤと一緒に生息していて、下の塩原には3種のフフミンゴが繁殖しています。

タンピチンチラを捕食する動物はあまりいません。筆者はコロニーの中で、または近くでキツネの糞を31個見つけましたが、その中から見つけた被捕食動物の7・2%がチンチラで、その骨や歯の大きさから判断して、ほとんどは子どもチンチラのものでした。砂漠地帯にしてはキツネが多いと思われるのですが、チンチラを食べているからか

もしれません。かつてはアンデスマネコ (*Oncifelis jacobita*) がこの地区に多く、チンチラを食べていたようですが、現在、まったくいなくなったのはチンチラがいなくなったからだと言

う学者もいます。しかしこれはあくまでも仮説にすぎません。また、地元の方レットやピューマもチンチラをかつて食べていた可能性はありますが、確かな報告はありません。



絶滅したと見なされていたタンピチンチラが、2001年3月、ヒメネス博士の調査によって再発見されました。ユヤイヤコ国立公園でタンピチンチラを抱くヒメネス博士

Photo : ©2002 Jaime E. Jimenez



リチャード C. ゴリス (Richard C. Goris)

1931年アメリカ、ニューヨーク州に生まれる。豊かな自然に恵まれたナイアガラ河畔で多くの動物に囲まれて少年時代を過ごす。

1950年来日。東京医科歯科大学、九州大学理学部を経て、現在は横浜市立大学医学部で客員教授をつとめる。理学博士。専門は生理学。

爬虫類の権威として知られ、長年日本爬虫両生類学会役員、会長を務め、現在は同学会名誉会員。比較眼科学会名誉会員、日本愛玩動物協会理事、ジャパンケネルクラブ公認訓練士。

チンチラ、リス、モルモット、ウサギ、チスイコウモリその他の小動物に関しても飼育法を開発し、飼育施設を手作りするなど多くの工夫

を重ね、現在もチンチラ、秋田犬、ヘビ、トカゲなど多くの動物を飼育。

「日本の爬虫類」、「現代エチケット・マナー百科事典」、「アメリカ英語辞典」、「現代スラング英和辞典」、中学校・高等学校用文部省検定教科書（英語）など、数々の原著・訳本を發表している。

コラム執筆

ハイメ E. ヒメネス博士 (Jaime E. Jimenez)

チリ ロス・ラゴス大学生態学研究所。

1980年代にWWF（世界自然保護基金）とCONAF（チリ林野局）の支援で3年半にわたり野生チンチラの保護と管理のための生物学的データを集める。2001年3月に絶滅したと見なされていたタンビチンチラをユカイヤコ国立公園で発見する。

撮影：井川俊彦

撮影協力：お魚かぞく、関根千津、水野由香

商品協力：(株)三晃商会

絵：若林 稔

写真協力：市川香里、川崎昭博、倉田典子、長谷川和江、廣田 聡、湯浅博子

ブックデザイン：(株)ムックハウスJr.

イラスト：山本しげお